

夏目漱石『野分』主題論

夫伯*

〈要旨〉

本稿は、日本の近代作家夏目漱石によって創作された『野分』の主題性について考察した論である。研究の方法論として、文芸理論〈主題導出理論〉を採用している。

『野分』の作品内世界には、金権力の称賛される世の中に対し、被害者意識・嫌忌の感情を抱懐していた中心人物高柳が、金の力に勝る君子的人格の優位性を提唱する旧師白井と再会し、その師による思想を以て、かような世の中を是正しようという意志を抱いていくという現在進行事件が成立している。

要するに、換言して言えば、物質万能主義の蔓延する世を怨み憎悪する高柳が白井思想により健全かつ道義的な精神性を獲得するプロセス・救済される過程の織り込まれた『野分』は、かような文明社会が君子的な人格・精神性により指導・主導されるべきであることを世に問うた作品であると言えるであろう。

『野分』は「社会状況」の「矯正」「警醒」の意図が露骨であり、したがって実に啓蒙的な作品であると言える。しかもその「矯正」されるべき「社会状況」の実態は簡略かつ抽象的に提示されるだけであり、具体性にかける。しかし、英国留学時代から初期作品群の執筆された時期に殊に顕著であった西欧近代化の受容に対する漱石の見解・問題意識が、『野分』において、始めて、明確なる発端・発展・転換・結末の構造を内在する安定した作品構成を以て主題化されたという漱石文学史上の意義は、決して見落とされてはならないであろう。

キーワード：物質万能主義、君子的人格・精神性、矯正、主題化、漱石文学史上の意義

1. 序論

『野分』は1907年1月1日に雑誌「ホトトギス」に発表された作品である。

日露戦争(1905年9月終了)直後における日本では、西欧近代化がさらに発展して行く中、資本主義の急成長による社会的な矛盾や不均衡が構造化を遂げようとしていた。

殊に1905年～1906年は、次のように、社会主義者らによって主導される労働争議・同盟罷業・市民社大会等の社会運動が大きな展開を遂げ始めた時期でもあった。¹⁾

1) 1905年2月23日夕張炭坑の坑夫らが賃上げを主張し同盟罷業。5月上旬「共産党宣言の翻訳掲載された『平民新聞』が東京の一部兵士らに配布され問題となる。5月13日門司にて石炭仲士700人余りが賃上げを主張し同盟罷業。7月23日大阪のアルカリ会社にて労働争議。8月23日大阪鉄工桜島造船所にて1200人の職工らが同盟罷業を企図していたことが明らかになり、17人が拘引。

1906年2月23日足尾銅山にて日本鉱山労働会が結成される。1月14日西川光二郎らが日本平民党を結成。1月28日 堺利彦らが日本社会党を結成。2月4日石川島造船所にて750人に及ぶ職工らが同盟罷業。2月24日日本社会党と日本平民党が日本社会党第1回大会を共催。3月3日福井県の羽二重業にて8500人もの職工が同盟罷業。3月11日「東京市電値上げ反対」市民大会が開催され、1600余人のデモ隊が市庁と電鉄会社を襲撃。軍隊及び騎馬巡査隊の出動により鎮圧。5月1日阪神電鉄の車掌ら120人が労働争議。6月4日横浜市の左官職人ら209人が同盟罷業。8月1日東京市電の値上げが認可され、9月3日には

そして、その詳細については結論部分にて後述することになるが、1906年の後半期に記された漱石による書簡には、そのような現実に対する彼の義憤や批判、さらには、かような社会的な現状を自らの創作活動を通じて啓蒙・改革せんとすることを示唆した彼の決意等が少なくない。

ところで、『野分』に対するこれまでの研究は、当時における社会的・時代状況に深く踏み入ることなくして、そのような漱石による示唆的・断片的な見解と、「文筆の力で自分から卒先して世間を警醒し(220)」主導することを志す文学者自井道也のイメージ及び自井による主張や発言等とを絡み合わせることにアクセントの置かれた作家論的研究が主流であった。

また、『野分』は比較的早い時期から片岡良一氏の「一つの転機—『二百十日』と『野分』」²⁾により失敗作と評定されており、その後における本作品に対する研究は極めて消極的であると言っても過言ではない³⁾。

このような状況の中で論者は、研究の方法論として<主題導出理論>⁴⁾を採用し、作品の構造的・過程的な内部状況と、作品外部の作家や時代的・社会的状況等との有機的な相互関係を把握することを以て、『野分』の作品内世界に内在する主題性により客観的な態度で接近することにする。本稿は、『野分』の作品内世界を構造的・綿密に分析した結果と、作品発表当時の時代状況及び作家の現実認識等との有機的な相関性を考察することを以て、『野分』の主題性に接近し、さらにまたこのような手続きを通じて、本作品の文学的意義の検討を試みた論である。なお、テキストは岩波書店の1979年版『漱石全集第四巻』を使用し、引用はページ数だけを記載することにする。

反対運動が激化・暴動化。8月18日呉海軍の造兵部職工300人が労働争議。

* 慶熙大学校、日本近代文学

2) 『夏目漱石の作品』、厚文社、1955

3) 『野分』を失敗作と評定し、かつ漱石と自井道也等とのイメージを絡み合わせた作家論的研究傾向の著名な論として、瀬沼茂樹『夏目漱石』(東京大学出版会、1962)・荒正人『評伝夏目漱石』(実業之日本社、1960)・小泉浩一郎「『野分』の周辺」(湘南文学、1981)・金子博「漱石序論—『野分』を中心に」(日本近代文学、1982)・酒井英行「『野分』論」(文芸と批評、1983)・秋山公男「『野分』の成立」(立命館文学、1986)などを挙げる事ができる。

4) <主題導出理論>は金采秀博士により考案された文芸研究理論。作品内世界が抱摂する主題性を導出・考察することを目的とする。

この理論は、作品における①ナレーターによる叙述形式と、②ストーリーの基本的な骨格、③進行事件の展開の様相、④事件の転換点と転換の様相に対する分析を通じて、作品内世界に内在する構造と特性を明確にし、⑤さらにそのような分析の結果を、結論部にて、作品を取り囲む外部状況と照合することを以て、主題を考察するという方法論に依拠している。

このような方法論についてももう少し具体的に銘記しておくこととする。①のプロセスでは、どのような特徴を持つナレーター及び視点人物が設定されているのかを分析し、②のプロセスでは①における分析結果をもとに中心となる人物を把握し、また、その中心人物を主体にどのような事件が進行しているのかを把握する。

まずは、このように、作品内部の大段を理解し、次に③のプロセスではそのような事件がどの時点から発端を遂げ、どのように発展・転換し、結末に至って行くのかという進行事件の展開の様相と構造的特徴を明確にする。そして、このように作品内世界に内在するストーリー及び展開の様相と構造を把握した後に、④のプロセスにおいて転換点に焦点を合わせ、その転換の様相を精密に分析し、作品内世界が包含する中心的な観念・思想を明らかにする。さらに⑤では、それら作中内世界に対する分析の結果を、結論部にて、作者や時代状況あるいは読者と関連して考察することを以て、作品の主題性を客観化するのである。なお <主題導出理論>の理論体系は『소설의 주제도출법』(박이정,1997)に詳しい。

2. 本論

作品の主題とは、作家が読者に伝えようとする中心的なメッセージである。しかしながら、作家のメッセージはテキストの言語表現様式と内容それ自体を除いては存在することができない。即ち、私達はテキスト全体の言語的表現様式の特徴と作中世界を一貫する表現内容の秩序を把握し、主題に近づいていこうとするものである。テキストがどんな様式によって叙述されており、その主な内容が何であるのか。作中世界を引っ張っていく進行事件は何であり、どのように展開されるのか。事件の転換点は何であり、主人公はどう変化したのか。このような点を順序立てて知ることに⁵⁾、〈主題導出理論〉では作品の主題を導き出して行く。従って『野分』の主題性を導き出して行く方法として、以下本稿では、ナレーターによる叙述形式・中心人物と中心事件・進行事件の成立経緯・進行事件の展開様相・転換点と転換の様相などを明らかにして行くのである。

2-1. ナレーターによる叙述行為の特徴

大部分の近・現代小説文学では、普通、ナレーターが作品世界にとある視点人物を設定し、その人物を通して叙述行為を行っていくという、いわゆる内部視点の形式が取られている。

しかし『野分』には、特定の視点人物が設定されていない。この作品ではナレーターが、言わば一種の霊的存在として作品内世界に侵入し、作中人物の処している場所における風景、彼らの見聞きしたことや感じたことや言動、さらにはそれに対するナレーターの感想や批評等を、ナレーター自身の立場から叙述するという外部視点、すなわち全智全能的視点を取ることをその特徴としている。

- ① 黒縮緬へ三つ柏の紋をつけた意気な芸者がすね違ふときに、高柳君の方に一瞥の秋派を送った。高柳君は鉛を脊負った様な思心持ちになる。
石段を三十六おりる。電車がごうつごうつと通る。岩崎の堀が冷刻に聳えてゐる。あの堀へ頭をぶつけて壊してやろうかと思ふ。時雨はいつしか休んで電車の停留所に五十六人待つている(273)。
- ② 黒い髪のただ中に黄の勝つた大きなりボンの蝶をさっとひらめかして、細くうねる首筋と今眞直ぐに立って直す女の姿が目につかつた。紅みは目の縁を薄く染めて、潤つた睫毛の奥から、人の世を夢の底に吹き込む様な光を中野君の方に注いでゐる(中略)演奏会は数千人の人を集めて、数千人の人は悉く双手を挙げながら比二人を歓迎して居る。同じ数千人の人は悉く五指を弾いて、われ一を排斥している。高柳君はこんな所へ来なければよかつたと思つた(229~239)。
- ③ 酔興を三たび重ねて、東京に出て来た道也は、もう田舎へは行かぬと言ひ出した。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。學校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯正するには筆の力によらねばならぬと悟つたのである(198)。
- ④ 道を守るものは神よりも貴しとは道也が追はるる毎に心のうちで繰り返す文句である。但し妻君はかつて此文句を道也の口から聞いた事がない。聞いても分かるまい。
わからねばこそ飢え死にもせぬ先から、夫に対して不平なのである(中略)妻君の世界には夫としての道也の外には學者としての道也もない。志士としての道也もない。道を守り俗に坑する道也はな

5) 김재수 편저, 『소설의 주제 도출법』 박이정 1979, p.129 (韓國語原文の翻譯は筆者による)

お更ない。夫が行く先々で評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、到る所に職を辞するのは、自ら求むる酔興に外ならんと迄考へてゐる(192)。

- ⑤ 寒そうな顔を玄関の障子から出すと、道也の足元が立っている。細君は「おや」と云つた。道也の兄は会社の役員である。(中略)「近頃は少しどうかして居るんぢやないかと思ひます」「何とも云へませんね。— 何でもしきりに金持やなにかを攻撃するさうぢやありませんか。馬鹿ですわね。そんな事をしたつて、どこが面白い。一文にやならず、人からは賓斥される。つまり自分の 鑄なる 許でさあ」「少しは人の云ふ事でも聞いて呉れるといふですけれども」(297)。

このようなナレーターの叙述行為により『野分』の作品内世界では、物質万能主義に侵された「社会状態を矯正(193)しようとする者(白井道也)、物質万能主義の趨勢に苛まされる者(高柳周一)、物質万能主義に趨勢に追従する者(白井の妻・兄)等による言動はもちろんその心情・心理までが対象・網羅されている。

しかしながら本作品のナレーターは、作中人物の中でも、高柳による言行及びその心理・心情等の内面的状況をもっとも頻繁かつ綿密に把握し、叙述している。

この点については、次節「中心人物と中心事件」にて、ナレーターによる叙述を章別に分析した内容に明らかであるが、それでは『野分』ではなぜこのような叙述の方法がとられたのであろうか。これは、中心事件・現在進行事件の構造が把握されない限り、論及の難易な問いである。このことについては本論を経過した後結論部分で改めて検討してみたいと思う。

2-2. 中心人物と中心事件

『野分』のナレーターは前節で考察された叙述形式の特徴を以て、作品内世界を12章に分けて叙述を行っている。そしてナレーターは主に次のような内容について叙述している。

第1章：東京で大学を卒業し、越後にある中学に英語教師として赴任した文学者白井が当地で富める者、勢いのある者らが幅を利かす状況に強く反感を抱き、金と人格とは次元を別にするものであることを主張するが、全く受け入れられず、人格や道を軽視し、金や地位に追従する人々から抑圧され、高柳を含めた教え子らからも嘲笑・批難され、排斥されるという状況。さらにその後も、転任先の北九州及び四国地方の中学にて、同様の状況に遭遇し、同様の実践を試みるが、同様の扱いを受けるという状況。そしてその結果白井が教師を辞め、8年ぶりに東京に戻り、執筆活動を通じてかような社会の状況を正そうと決意するという状況。

第2章：高柳が電車の中でなくした「地理教授法(203)」の草稿を「新橋の先迄(202)」探しに行き、その帰りがけに日比谷公園で偶然中野と出会うという状況。そして中野との会話の中で、創作に打ち込むだけの時間がないことを嘆き、幅を利かし勢いのある実業家を妬むという状況。

第3章：「人格論(224)」の執筆に打ち込む一方、「江湖雑誌(235)」の編集で生活を凌いでいる白井が「現代青年の煩悶に対する解決(212)」という企画の関係で偶然に中野の家を訪問し、彼の「恋愛論」を取材するという状況。

第4章：中野に誘われて音楽会に行った高柳が、優雅な雰囲気の中で周囲から賓折されるかのような痛烈な孤独感に襲われるという状況。また高柳が中野から、白井が江湖雑誌の記

者として訪ねて来たということを知られるという状況。

- 第5章：ミルクホールで江湖雑誌を見つけた高柳が、「解脱と拘泥(238)」という稿を読み、世の豪商等のあり方を痛烈に批判する内容に圧倒されるという状況。
- 第6章：白井の家を訪問した高柳が、白井から薫陶を受け、また白井が「解脱と拘泥」の作者であるということを知るという状況。
- 第7章：中野と音楽会を訪れていた女が、美しく飾られた部屋で中野と恋愛の遊戯にふけるという状況。
- 第8章：体調が頗るすぐれず、痛烈な孤独感に苛まされている高柳が、偶然に白井と出会い訓戒を受けるという状況。
- 第9章：中野と例の女との結婚の園遊会に招待された高柳が、園遊会の富と勢いと得意の蔓延する雰囲気の中で打ちのめされたような気分になるという状況。
- 第10章：完成した白井の著作を出版社が買い取ろうとしないという状況。さらに、白井の兄が白井の妻に、「白井が不穏な言論を以て豪商などを攻撃するのを控えさせてほしいと社の課長から注意された」ということ、白井を教師に夏職させるための策略、白井が近いうち過激な演説をやるようなのでこれも阻止しようと思っていることを打ち明けるという状況。また白井の兄は、かつて自分が保証人となって人から借りてやった百円は実は自分の金なのであり白井を教師に夏職させようと思ってそのような布石を打ったと、白井の妻に伝えている。
- 第11章：「社の者が電車事件による嫌疑で拘束され、その家族の者が困っているので演説の収入で救援してやるのだ」と妻に告げ精輝館向うとする白井を、彼女が「社会主義だなんて間違えられるとあとが困ります(303)」と引き留める状況。また、高柳が白井による演説「現代の青年に告ぐ(300)」の内容に聞きほれ、大いに興奮するという状況。
- 第12章：咯血し病床に伏した高柳のもとを中野が訪れ、養生しながら創作ができ、さらにその作品を世に出せるようにするという機会を提供するという状況。また、高柳が白井に越後時代からの弟子であったということを告白し、さらには白井の「偉大なる人各論(128)」を世に出そうと、中野の提供した絶好の機会を白井に譲ってしまうという状況。

『野分』は、特定の視点人物が存在していないので、中心人物の確定が比較的難しい作品であると言える。しかしながら、先にも述べたように、ナレーターは高柳の言行及び彼の内面的状況についてもっとも頻繁かつ綿密に叙述を行っており、それはたとえば、6章と8章で高柳と白井が出会う状況においても、心理描写の中心は高柳に置かれ、白井の内面的状況はほとんど叙述されることがない。また、『野分』の作品内世界では高柳だけが劇的な意識・認識の転換を引き起こしている。

確かに白井にも意識の転換らしきものは見られぬ訳ではない。金と人格は別次元のものであるという彼の见解が、越後・北九州そして中国地方でも嘲笑・批難され、8年ぶりに東京に戻って来た白井は教師を辞め執筆活動を通じて「愛想をつかした社会状況を矯正(193)」しようと思意する。⁶⁾しかし、彼による転換はナレーターにより過去時制で叙述される第1章で一気に達成

6) 1906年の後半期に、記された漱石の書簡には、「僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる(中略)僕は打ち死をする覚悟である。」(1906年10月23日狩野享吉宛書簡、「漱石全集第28巻」、岩波書店1979、p.116)・「死ぬか生きぬか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやって見たい」(1906年10月26日鈴木三

されており、その第1章の終焉部において白井は新たなる決意を固めている。そしてその後白井は、最終章である第12章に至るまで、一貫してその意志を貫くだけなのである。

ナレーターが現在の時制を以て叙述を始めるのは第2章からであり、第2章は高柳の言動を中心に始まっている。そして高柳はこの第2章から最終章に至る現在進行事件上において明確な意識転換を引き起こしている。さらに、現在進行事件は、彼による言行を以て終了を遂げている。したがって、以上のような理由・観点から、高柳が本作品における中心人物であると論定されるのである。そして前記した1章から12章にわたる分析の内容からすでに明らかであるように、『野分』とは高柳を主体とした師弟関係の物語であり、その作品内世界は、高柳が過去において嘲笑していた教師白井を偉大な師として認識して行くという基本構造を以て成り立っていると言えるのである。

2-3. 現在進行事件成立の経緯

小説の作品内世界では、物理的な現在の時制をもって、中心人物を主体とするひとつの事件が進行しており、一般にそのような現在進行事件上において、中心人物による断片的な過去の回想や中心人物の過去についての周辺人物による回想、あるいは中心人物の過去を知らせる手紙等の導入が繰り返されている。そして、そのような過去を提示する事項・内容を集め、時間的・系列的な処理を行う時、中心人物が小説的現在の発端時点以前に経験していた過去の完了の世界、すなわち中心人物が小説的現在の発端時点に至るまでの経緯が導出される。『野分』の作品内世界における、中心人物高柳の過去完了の世界は主に次のようである。

高柳周一は越後の高田出身である。高柳は7つの時から父親不在の家庭に育った。「七つの時おやじは、どこから行ったなり帰つて来ない。友達は夫から自分と遊ばなくなった。母に聞くと、お父さんは今に帰る帰ると云つた。母は帰らぬ父を、帰ると云つてだましたのである(232)」。高柳は町の「郵便局の役員(276)」であった父が「官金を消費した(276)」罪で拘束され、「肺病になつて牢屋の中で死んで仕舞つた(276)」事実を後に知った。

中學の時分に白井道也という大学を出たばかりの英語の教師が東京から赴任して来た、「越後は石油の名所である。学校の在る町を四五町隔てゝ大きな石油会社があつた(中略)道也はある時の演説会で、金力と品性と云ふ題目のもとに、両者の必ずも一致せざる理由を説明して、闇に会社の役員等の暴慢と、青年弟子の何等の定見もなく徒らに黄金万能主義を信奉するの弊とを戒めた(187)」。

その結果、白井は周囲から抑圧され、甚しくは教え子らからも嘲笑・批難され、排斥された。高柳もその中にいた。

その後、大学にまで進学した高柳はしごく貧しかつた。それで「富裕な名門に生まれ(201)」た友人の中野輝一に「金を借せの、西洋料理を奢れのとせびつた(319)」りもした。

大学を卒業するや高柳は「立派な作家になつて、有名になつて、さうして楽に暮らさう(265)」と焦った。母は「住み古した家を引き払つて、生まれた町から三里の山奥に一人侘しく暮らして居る。卒業をすれば立派になつて、東京へでも引き取るのが子の義務である。逃げて帰れば親子共餓えて死ななければならん。(232)」しかし、創作をするにも生活をするための金

重吉宛書簡、前掲書p.123)等をはじめとする、当時の物質万能主義の蔓延する世の中(現実)に対する彼の義憤や、さらにはかような社会的現状を自らの創作活動を通じて改革せんとする決意等の示唆された内容が少なくない。

『野分』における白井道也の考え方や主張や行動は、かような作家漱石による見解・時代認識をより具体的かつ詳細に代弁していると思われる。

が必要である。それで、「一頁五十銭を越ゆべからず、一ヶ月五十頁を越ゆ可からかず(237)」という条件で「地理教授法の訳(203)」を引き受けた。ところが翻訳をやると到底創作をする時間が出てこない。そして1ページ50銭・ひと月50頁までの翻訳をやっても月に20円50銭にしかない。しかも、苦心して仕上げた原稿を電車の中で失ってしまった。それで高柳は「新橋の先迄遺失品を探しに行つて其帰りがけに一寸序でだから(203)」日比谷公園を巡廻した折に偶然中野に出会ったのである。

このように、幼少の時分に金があだと成って父を失い、その後困窮した生活に虐げられ、大学卒業後も「衣食の為に勢力をとられ(247)」「述作などをする暇はとてもない(205)」高柳は、「黄金万能主義(187)」の蔓延する世の中が「創作をさせて呉れない(275)」のだと抱懐するようになり、金の力を享受する輩を「仇(204)」にさえ思うようになった。また、彼の身体には父と同じ肺病の兆候があらわれるようにもなった。そして、こうした経緯を経た後に、高柳周一を中心とする現在進行事件が展開し始めるのである。

2-4. 現在進行事件の展開様相

作品内世界における現在進行事件の発端は1906年の9月頃であると推定され、その終了は1906年12月の末頃であると分析される。そして現在進行事件は次の7つの段階に整理・把握される。

高柳周作は日比谷公園で中野輝一に出会う。高柳は前日「地理教授法の訳(203)」をなくし、「新橋の先迄遺失品を探しに行つてその帰りがけに(203)」公園に立ち寄ったのである。両者は大親友の仲であり、大学出たての「世訓れぬ文學士(212)」であり、そして著名な作家になることを目指している。しかしながら高柳のほうは生活に困窮しており、存分に創作に打ちこむだけの金と時間を作ることのできない現状を深く嘆いている。さらに高柳は金の力の跳梁する世の中を「冷酷の競技場(204)」と評し、幅をきかし勢いのある実業家らを「仇(204)」であると主張する。また、高柳はかつて中学生の時分に教師たちに「煽動され(206)」「生意気(207)だ」と言つて、いじめて追い出してしまった白井道也もさぞ生活に困ったことであろうということを中野に打ち明ける。そして今後白井に逢えることができたならば謝罪するつもりであることを中野に告げる。

その後も、高柳と中野は動物園の前で再び偶然に出会い、中野が彼を慈善音楽会に誘う。高柳が音楽会に臨むのははじめてのことであり、優雅な西洋音楽と雰囲気覆われた会場で彼は「異種類の動物(227)」に「包囲(227)」され賓折されるような痛烈な孤独感におそわれる。さらに、「衣食の為に(233)」ではなく「娯楽の為に活動(233)」する余裕ある彼らを咀わしく思つたりもする。また高柳は中野から白井が江湖雑誌の記者として訪ねてきたこと及び彼が高柳と同様のみすばらしい身なりであったということを聞く。音楽会終了後、中野は会場で待ち合わせた女と食事の約束があると言つて高柳と別れる。また、彼は高柳が妙な咳をするので心配する。

その後のある日、ミルクホールで重ねてあった新聞・雑誌の中から江湖雑誌をさがしあてた高柳は詳細に眼を通す。その中に「解脱と拘泥…憂世子(238)」という稿がある。そしてそこでは人の踏み行ふべき道、すなわち道徳なくして社会は成立するはずなく、社会的な影響力のある豪商等はこれを解することがない。堪しくは彼らはその専門の学徒を圧迫しあるいは墮落さようとする罪人であり、学徒は大道徳を具現するためにも世の中の風俗に拘泥せずに解説を要

す'という主旨が力強く主張されている。これを読んだ高柳は「茫然(283)」とする。そしてその後、高柳が白井の家を訪問する。彼は同様に貧しく暮らす白井に昔からの関係を自白して、お互いに親しみ合う間柄に成りたいと思うが、うまく告白することができない。また、高柳が生活に追われ文学に取り組むことができないという苦悩を吐露すると、白井は「文学は人生そのものであるのだから苦痛や困窮等を経験するのならば、書物を読まなくても立派な文学者である」という

具合に苦痛や困窮の意義を教え諭すのだが、これに対して高柳は何ら答弁ができない。さらに、この再会を通じて高柳は、白井が「解脱と拘泥」の作者であることも知る。また、高柳の妙な咳を白井が心配する。

「暮るゝ秋の寒き(267)」中、高柳は体調がすこぶるすぐれず、仕事をする元気もない。さらに、痛烈な孤独感におそわれ、世間がきわめて呪わしく思われ、あの世に行けたらとさえ思ったりもする。それで、彼はあてもなく散歩に出かけるのだが、いつの間にか岩崎邸の壁につきあたり、その壁に頭をぶつけて壊してやりたいという思いにかられる。その時、偶然に白井と出会い、彼から訓戒を受ける。白井は「立派な創作をすればその寿命は岩崎などよりも長く伝わるのであり、君はこれから花咲く身である。一人坊っちは崇高なものである」という主旨を高柳に語る。また、白井は、「自分は君とは違って満足を得るために世のために働くのだ」と主張する。

その後「小春の日に(279)」中野と例の女の結婚の園遊会が開かれる。そして高柳は遅れて来るのだがきまりが悪い。彼の服装は来客の中で最も貧相である。そのため来客からさげすまされるような視線を浴びたりもする。「富と勢いと満足の跋扈する所は東西球を極めて高柳君には敵地である(282)」。しかし、エジプト産の葉巻を愛用すれば、一日に「二十圓(287)」しか使わないで済むと吹聴する若者(二十圓は高柳の月の収入である)、株で儲けて「合計三萬二千五百圓になりました(287)」と豪語する実業家らを目撃した高柳は「打ちのめさるゝが如き心地(289)」となり、中野らには何も告げずに帰ってしまう。

その後、12月「12日(299)」に白井の演説「現代の青年に告ぐ(300)」を聞くために、高柳は精輝館を訪れる。そして彼は白井による「金あるところに理もあると考えるのは愚の極。金を目やすに人物の価値を決めるわけにはいかない。金以上の人生・道徳等の問題に対して金のある者は学者の前に絶対服従をせねばならない」等の提唱に聞きほれ、大いに興奮する。

高柳は「演説を聞いて帰つてからとうとう咯血し(318)」病床に伏すことになる。しかしそこへ、中野が彼の妻の提案で高柳の養生のための金を準備して来る。

そして、「転地で養生してもらう代わりに、そこで一大傑作を書け上げてもらいたい」という条件で、高柳は中野から「百圓(322)」を受け取ることになる。ところが、結局高柳はその百圓で借金の工面をできずにいる白井の著作「人格論(328)」を譲り受けることに使ってしまう。高柳は白井に、越後で先生をいじめて追い出した弟子の一人であることを告白し、また自身の著作などよりも、「より偉大なる人格論(328)」を中野と彼の妻に提出しようとするのである。

このように『野分』に内在する現在進行事件は上記の7つの段階を経過するものとして理解され、さらにこれらは次の7つのプロセスに分析することができるのである。

- ① 高柳が抱懐する金の力の跳梁する世の中に対する被害者意識と嫌忌が露呈する過程
- ② 高柳が金の力の称揚される現実と接触し、彼による被害者意識・嫌忌がいつそう深化する過程

- ③ 高柳が白井と再会し、白井の思想に接触・圧倒される過程
- ④ 高柳が白井を師と認めつつもその思想性を正確に認識できず、その被害者意識・嫌忌をさらに深刻化させて行く過程
- ⑤ 高柳が金の力による権勢を実際・詳細に目撃・確聞し、彼による被害者意識・嫌忌が粉碎される過程
- ⑥ 高柳が白井思想の偉大さを正確かつ深く認識・理解する過程
- ⑦ 高柳が偉大であると諦観した白井の思想をもって、世の中の是正を試みようとする過程

要するに『野分』における現在進行事件は、中心人物が物質万能主義の蔓延する世に対する被害者意識・嫌忌の意識を、葛藤を経験しつつ、社会改革の意志にまで転換させて行くという展開の様相を基調としているのである。

2-5. 事件の転換点と転換の要素及び転換の様相

それでは、『野分』の作品内世界において質的な変化の引き起こる時点は、正確にどの時点であると言えるのであろうか。以下、それを考察して行く。

幼少の頃に金があだと成って父を失い、その後生活苦に虐げられ、大学を卒業した後も「衣食の為に勢力をとられ」「述作などをする暇はとてもない」高柳は、物質万能主義の蔓延する世の中が「創作をさせて呉れない」のだと抱懐するようになり、金の力を享受する輩を「仇」とさえ思うようになった。また彼の身体には父と同じ肺病の兆候まであらわれるようになった。

そしてその後、旧師白井と再会するに至った高柳は、かような被害者意識・嫌忌に苛まされるたびに白井から薫陶や訓戒を受けているのだが、結局はそれらを正確に認識・理解できず、「拘泥」から逸脱することができない。また、白井に越後時代からの弟子であったということも告白できない。

ところがその後、金権力者らによる勢威の現実を目のあたりした時、高柳は「打ちのめされるゝが如き」気分になる。つまり、敵勢の猛意は彼による想定を揺るかに上回るものであったからである。

したがって高柳は再び、重い体を引きずり、白井の教えを求めて精輝館へと向う。そして、白井による主に次のような力強い主張・提唱に、下記のような痛烈な歓喜を経験する。

「學問即ち物の理がわかると云ふ事と生活の自由即ち金があると云ふ事とは独立して関係のないのみならず、反つて反対のものである。學者であればこそ金がないのである。金を取るから學者にはなれないのである。(中略)金のある所には理窟もあると考えてゐるのは愚の極である(中略)換言すれば金があるから人間が高尚とは云へない。金を目安にして人物の価値をきめる訳には行かない(中略)金持ちはいけない(中略)気品とか人品とか云ふ事に関して、學問のある、高尚な理窟のわかつた人に頭を下げることを知らん。のみならず、却つて金の力でそれ等の頭をさげさせ様とする(中略)學問のある人、訳のわかつた人は(中略)學問を、以て、わけの分つた所を以て社会に幸福を与える(中略)金以上の趣味とか文學とか人生とか社会とか云ふ問題に関しては金持ちの方が學者に恐れ入つて来なければならん(中略)道徳問題であり、社会問題である以上は彼等金持は最初から口を開く権能のないものと覺悟をして絶対的に學者の前に服従しなければならない(中略)彼等は是非共學者文學者の云ふことに耳を傾けなければならぬ時期がくる。耳を傾けねば社会上の地位が保てぬ時期がくる」聴衆は一度にどつと関を掲げた。高柳君は肺病にも拘らず尤も大なる関を掲げた。生まれてから始めてこんな痛快

な感じを得た(313~317, 傍点引用者)。7)

この時点が『野分』の作品内に世界における転換点である。つまり、高柳はこの時点においてはじめて、金の力に勝る人格の優位性をその中心的観念とする白井の思想を熟知するのである。

そして、このような転換の要素の導入された中心人物高柳の意識と行動は、その後、主に次のように変容する。

①物質万能主義の蔓延する世の中に対する被害者意識及び嫌忌の意識に鎖され、苛まされ続けてきた高柳が、はじめて「師走の(324)」の衆生に目を向ける。そしてその過去の意識からの逸脱を示唆する「世は様々である(324)」との評を下す。

②白井に、彼を越後でいじめて追い出した弟子の一人であること、ついにを告白する。

③略血し病床にふした高柳のもとを中野が訪れ、養生の資金を提供する代わりに「君に一大傑作を世間に出して貰ふ(324)」、書き上がったなら提出してもらおうという条件で高柳に百圓を援助する。つまり高柳は、中野の出してくれた百圓で養生しながら創作を行い、完成後に中野に差し出せば、彼がそれを世に出してくれるという最良の好条件を手に入れるわけである。ところが結局、高柳はその百圓で借金の工面をできずにいる白井の著作を譲り受け、そして自身が書き上げるであろう著作よりも「より偉大なる人格論」を中野と彼の妻に手渡そうとする。

特に③における判断と行動とは、被害者意識・嫌忌の意識に強く固執していた高柳にとって、もっとも大きな変化であると言える。

白井思想を熟知した高柳は、養生ができ創作でき自身の著作を世に出せるという究極の機会、「立派な作家になって、有名になって、さうして楽しく暮らさう」というかつてからの願望全く放棄し、白井思想の結晶であるに違いない「偉大なる人格論」を中野夫婦に手渡そうとするのである。そして中野夫婦の手に渡れば、彼らは白井思想を知ることになる。またさらに、「人格論」は中野の手を通じて出版され、世に知られることにもなる。

要するに、③における判断・行動の奥底には、高柳による白井譲りの社会改革の意志が潜在していると言っても過言ではなからう。

『野分』の作品世界に内在する転換点・転換の要素及び転換の様相を以上のように把握する時、本事件は、金権力の称揚される世の中に被害者意識と嫌忌を抱いていた中心人物が、金の力に勝る人格の優位性を提唱すると師と再開し、その師による思想を以てかような世の中を是正しようという意志を抱くに至る過程として理解されるのである。

高柳が明確な意識転換を遂げたのは、白井による公演の内容を傍聴した彼が、金の力に勝る

7) 英国留学当時の1901年4月頃に漱石は日本における西洋近代化の受容を懸念した「無学不徳義にても金あれば世に勢力を有するに至る事を事実を示したる国民は窮窟なる道徳を棄てて只金をとりて威張らんとするに至りし(中略)其結果愚なるもの無教育なるもの齢するに足らざるもの不徳義のものをも士大夫の社会に入れたる(中略)昔は金の力を以て社会的の地位高まらざりし」(『漱石全集第24巻』, 岩波書店1979, p64)といふ断片を記している。そして白井による「現代の青年に告ぐ」の演説の内容はこの断片に見られる漱石の見解と地続きである。即ち、「現代の青年に告ぐ」の内容は、英国留学時代から『野分』の発表の時期に至るまでプライベートな断片として記述されることになかった当代の西欧資本主義化に対する漱石の問題意識が、スピーチの域にまで形象化され流布されているという意味において注目し得るであろう。

人格の優位性をその中心的観念とする白井思想の本質を熟知したからである。そして白井は上記「現代の青年に告ぐ」の公演を通じて主に次の4点を段階的に力説して行く。

- ① 金があるから人格まで高尚であるとは言えない。
- ② 金持ちは、気品とか人品ということに関して学問のある高尚な理窟のわかった人に頭を下げるべきである。
- ③ 学問のある人わけのわかった人は、学問を以て、わけのわかった所を以て社会に幸福を与える。
- ④ 道德の問題・社会問題について金持ちは、学者・文学者のいうことに絶対的に服従なくてはならない。

つまりここで、白井が言わんとする人格とは、旧時代的な道義・道德の精神に精通する君子的な徳目を規範とするものであるに相違ないと言えよう。

3. 結論

本論で考察したように、外部視点を取るナレーターは、特に高柳言行及び内面的な状況について頻繁・綿密に多くのことを叙述しており、さらに『野分』の作品内世界に、彼を主体として物理的現在の時制を以て進行する事件を捉え叙述していた。

その事件とは、中心人物が物質万能主義の蔓延する世の中に対する被害者意識・嫌忌の意識を葛藤を、経験しつつ。社会改革の意志にまで転換させて行く過程であった。もう一度より具体的に言えば、それは、金権力の称揚される世の中に対し被害者意識と嫌忌の感情を抱懐していた中心人物高柳が、金の力に勝る人格の優位性を提唱する旧師白井と再会し、その師による思想を以てかような世の中を是正しようという意志を抱くに至る過程であった。

そして白井が提唱する人格とは、旧時代的な道義・道德の精神に精通する君子的な徳目を規範とするものであった。要するに『野分』は、物質万能主義に勝る君子的人格・精神性を以て社会が改善・改革されるべきであることが、強く強調された作品であるに違いないと言えよう。

このように『野分』では、白井の思想が中心人物である高柳の意識・認識に影響を及ぼすという構造が取られているのだが、以上のような構造・過程の意図された『野分』の場合、全知全能的な機能が付与されてこそナレーターは、白井の思想の内容及び高柳による苦悩・葛藤・思考の転換の推移を、物質万能主義の趨勢に追従する他の人物らの心情や心理等と対照・対比しつつ、より鮮明かつ平易に叙述することが可能である。本作品において外部視点が設定された理由はおそらくこの点にあると言えるであろう。

1868年に成立した明治政府による近代化政策の最も重大な課題は、欧米先進資本主義列強と国際社会において肩をならべる強国を造るための富国強兵策であった。経済面においてそれは18世紀の半ばにイギリスに起った産業改革を基礎過程とした資本制経済構造を導入するという形態が取られ、1897年～1907年頃にはその確立期を迎えていた⁸⁾。その結果、日本の社会にも当然、金持ちとか貧しい者とかということをもとに人を見る見方が波及・台頭⁹⁾した。さらに言えば、欧米先進国が約200年を要した資本主義化のプロセスを半世紀という短期間に達成し得た日本の社会では、物質万能主義を基調とする価値観の拡大は激しさを極めたに違ひなからう。

8) 高柳幸八郎『日本近代要説』、東京大学出版会、1993、p.200

9) 古川清行、『スーパー日本史』、談談社、1998、p.546

そして漱石は早くも英国留学の時代から「欧州今日文明の失敗は明らかに貧富の懸隔甚しきに基因致候(中略)平凡なる金持ちをして愚なる主張を實行せしめる 傾(中略)日本にて之と 同様の境遇に向ひ候はば(現に向ひつつあると存候)かの土方人足の知識文字の発達する本来に於ては由々しき大事と存候」¹⁰⁾等と、このような状態を達観・忌避し、さらにその初期の創作に至っては、『猫』(1905~1906)において辛辣な金権批判を表出し、『二百十日』などでは資本家等を指し、「第一義の目的はかう云文明の怪獣を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を与へるのにある」¹¹⁾という痛烈な激語を炸裂させた。要するに、漱石はその初期の作品において、火急な西欧近代化の導入と伴に浸潤する物質万能主義の風潮を、情神性に欠如した皮相な文明として鋭利に看取り、危惧していたのである。

また、1906年後半に記された漱石による書簡には、「現下の間違つた世の中には正しき人でありさへすれば必ず神経衰弱になる(中略)神経衰弱を草してして天下の犬どもに犬である事を自覚させてやりたい」¹²⁾「人生観を布衍していつか小説に書きたい(中略)馬鹿は成程社会の有毒分子だと云ふ事を人に教えるのが主意です」¹³⁾「小生もある点に於て社会主義故野村枯川氏と同列に加はりと新聞に出ても毫も驚く事無之候」¹⁴⁾「進んで当の敵を打斃してやらう (中略)男と生まれたからには其位の事はやればやれるのである」¹⁵⁾等と、前述したような現実(世の中)に対する彼の義憤や批判、さらにはかような社会的現状を自らの創作活動を通じて啓蒙・改革せんとすることを示唆した彼の決意等が少なくない。

序論でも述べたように、1906年は社会主義者らによって主導される労働争議・同盟罷業・市民大会等の社会運動大きく展開し始めた時期であり、また、1906年3月から9月にかかる期間、日本社会党は政府により東京市内電車の乗車料金が三銭から五銭に値上げされるのをとらえ過激な反対運動を展開した。

『野分』にもこの社会的なモチーフが「電車事件(303)」として導入されているが、その結果、社会党は1907年2月の12日に治安警察法により結社の禁止を余技なくされ、多くの党员らが拘束・投獄されることを以て、手も足も出せなくなった。¹⁶⁾つまり、『野分』の発表された1907年の1月とは、政府による社会主義者に対する弾圧が正に施行されようとしていた時期なのであった。

しかしながら、この時期における漱石の社会的・文学的関心は、社会主義者の掲げる思想や、それに依拠して展開された社会主義運動等にあったわけではない。作品内世界に、白井の妻が「社会主義だなんて間違えられたらあとが困ります」と白井を引き留める一幕が刻み込まれていたように、そして本論におけるこれまでの分析と考察からすでに明確であるように、彼による『野分』執筆時における目途は、道義・道徳に立脚した君子的精神を基調に以上のような社会的な状況の改善をはかろうとするところにあったのである。

もう一度言えば、漱石は、物質万能主義の蔓延する世を怨み憎悪する高柳が白井思想により健全かつ道義的な精神性を獲得・達成する過程、つまり言えば、救済される過程を織り込んだ『野分』を手懸けることを以て、かような社会が君子的な人格・精神により指導・主導される

10) 1902年3月15日 中根重一宛書簡、前掲書、p.121

11) 『漱石全集第4巻』岩波書店、1979、p.183

12) 1906年6月7日 鈴木三重吉宛書簡、『漱石全集第28巻』、岩波書店、1979、p.55

13) 1906年8月11日 高浜清宛 書簡、前掲書 p.76

14) 1906年10月23日 狩野亨吉宛 書簡、前掲書、p.116

15) 1906年10月23日 狩野亨吉宛 書簡、前掲書、p.118

16) 松尾洋、『治安維持法と特高警察』、教育社、1979、p.50

べきであることを世に問うたのである。

『野分』は「社会状況」の「矯正」「警醒」の意図が露骨であり、したがって実に啓蒙的な作品であると言える。しかもその「矯正」されるべき「社会状況」の実態は簡略かつ抽象的に提示されており、具体性に欠ける。しかし、英国留学時代から初期作品群の執筆された時期に殊に顕著であった、西欧近代化の受容に対する漱石の見解・問題意識が、初めて、明確なる発端・発展・転換・結末の構造を内在する安定した作品構成を以て主題化されたという漱石文学史上の意義は、決して見落されてはならないであろう。

【参考文献】

- 김채수(1997) 『소설의 주제 도출법』, 박이정
_____(1997) 『일본의 사회주의 운동과 사회주의 문학연구』, 고려대학교 출판부
_____(1994) 『영향과 내발』, 태진출판사
- 秋山公男(1986) 「『野分』の成立」, 『立命館大学493~495合併号』
荒正人(1984) 『漱石研究年表』, 集英社
_____(1960) 『評伝夏目漱石』, 実業之日本社
片岡良一(1960) 「一つの転機—『二百十日』と『野分』」, 『夏目漱石の作品』
金子博(1982) 「漱石序論—『野分』を中心に」, 『日本近代文学30』
小泉浩一郎(1986) 「『野分』の周辺」, 『湘南文学15』
酒井英行(1984) 「『野分』論」, 『文芸と批評5・10』
瀬沼茂樹(1987) 『夏目漱石』, 東京大学出版会
高柳幸八郎(1993) 『日本近代史序説』, 東京大学出版会
平岡敏夫(1987) 『漱石研究』, 有精堂
松尾洋(1979) 『治安維持法と特高警察』, 教育社

A study on the theme of 『Nowaki』 written by Soseki Natsume

Poe, Baek

ABSTRACT

In this treatise subjectivity was investigated by Japanese modern writer Soseki Natsume in his work.

By the structural analysis introduced literature theory, Subject Deduction Method. In 『Nowaki』's work, he talks about how financial power rules. Takayanagi, has aversions to those power but after he met a man of virtue his old teacher Shirai, he tried to put right with on-going event.

Put in other words, writer Soseki was in resentment with material almighty civilization. In addition to Shirai's ideology wholesome and morals, Takayanagi got right spirits and was influenced. In 『Nowaki』, those process was indwelled, as well as how the civilized society should rectify to virtue and moral, by questioning its society.

住所 : (135-271) 서울시 강남구 도곡동 948-30

電話 : 02)961-0840 (研究室) 02)3462-8812 (自宅) 017-211-8812 (H.P)

E-mail : poe21@hotmail.com